

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第395回

高知大学の活動報告



岩井 雅夫
(高知大学
海洋コア国際研究所
教授)

インドネシアから招へい

変動帯の地形・地質・防災対策

2023年12月12日から18日までの7日間、インドネシアパジャジャラン大学地質工学科長率いる学生・若手教員ら10名(日本語専攻の学生2名含む)を招へいし、巨大地震発生帯の地形・地質・文化・防災対策を共に考えるプログラムを実施しました。

地震・津波・風水害といった自然災害被害を度々受けてきたインドネシアと日本は、自然災害に強い地域創生が共通の課題となっています。そこで本事業では、共通の課題もつつも、文化・気候・社会構造が異なるインドネシアの若手人材を招へいし、海溝型巨大地震で作り出された隆起・沈降地域の野外巡検を実施、海洋研究開発機構と共同で運営する世界3大深海科学掘削試料保管施設での視察・実習を行い、「地震発生帯掘削の成果」や「変動帯に生きる」取り組みについて紹介・議論しました。

高知大学では、室戸ユネスコ世界ジオパークセンター内にサテライトラボを設置、ジオパーク専門員を客員講師として招へい、地域と密接に連携した実践的防災教育・持続可能地域創生支援活動を実施してきました。初日の海洋コア国際研究所でオリエンテーション実施後は室戸市に移動し、隆起域での地形・地質・文化サイトや津波避難シェルター等を視察、県立室戸高校では、次世代を担う両国の若手人材が双方のジオパーク関連活動を紹介、活発な質疑応答がなされ、学生同士の友好関係が築かれました。

中4日目には、午前中海洋コア国際研究所で深海科学掘削の歴史や掘削試料の保管・分析に特化した施設・設備を紹介、基礎的な試料観察実習を実施しました。午後は「地震発生帯掘削の成果」「変動帯に生きる」と題した2件の外部講師講演があり、関連な議論・

プログラムスケジュール	1日目	入国(羽田空港経由高知空港到着) オリエンテーション
	2日目	室戸高校で高校生と交流会 室戸GGNセンター、廃坑水族館、津波シェルター見学
	3日目	室戸岬展望台、金剛頂寺、国立室戸青少年自然の家 行当岬ジオサイト、吉良川の街並み見学
	4日目	海洋コア施設見学・実習 講演会、龍河洞見学
	5日目	久礼津波避難タワー、久礼街歩き 佐川地質館、高知大サイエンスギャラリー見学
	6日目	高知城、高知みらい科学館、五台山展望台、竹林寺など 高知市内の地形・地質・文化遺産視察、意見交換会
	7日目	学長・副学長と対談、修了式 帰国(羽田空港出発)

意見交換が行われました。後半は、高知中央部の久礼・佐川町・高知市で沈降地域の地形や、津波避難タワーを視察、多様性に富んだ地質と石灰岩地や蛇紋岩地の特異植生を、佐川地質館や牧野植物園、高知大学サイエンスギャラリーの展示で解説しました。

最終日には櫻井克年学長および受田浩之理事(いずれも当時)を交えて両大学の今後の国際連携強化について意見交換を行い、櫻井学長からプログラム修了証が参加者一人一人に授与されました。

■プログラムの成果

今回の「さくらサイエンスプログラム」参加の様子は、招へい者らが帰国して間もなくパジャジャラン大学のホームページに詳細が掲載されました。

イスラム圏の食生活や文化に戸惑いながら始めた招へい事業でしたが、ちよつとという気遣いで十分だということや親日的であることともわかり、国際交流推進に際し貴重な経験となりました。本事業推進には理工学部・理工学専攻・人文社会科学部の学生が協力してくれましたが、堂々とコミュニケーションを取る若手学生の将来性を感じました。協力者の一人は掘削船「ちきゅう」における研究支援員としての就職が決まり、早速この秋(20



世界最大級磁気シールドルーム見学



室戸の隆起変動地形(海成段丘)観察



櫻井学長(後列左から5人目)と受田副学長(同6人目)(いずれも当時)との集合写真

国際学術学生交流活性化で、地元の人との文化的交流も進み、相互に尊重しあえる関係が構築できれば、地方都市での外国人移住者受け入れもスムーズに進み、持続可能な地域・国際連携に貢献できるものと考えています。地方大学の国際対応能力は未熟な面もありますが、今回のような経験を積み重ね、高知大学が目指す、地域に根差しつつ地域から世界へ情報発信できるスーパードิจョナル・ユニバーシティの実現に向け一役買いたいと考えているところです。



顕微鏡観察用簡易スライド作成実習

温暖化に伴う異常気象が続く中、より温暖であった時代の海洋コア研究が重要と考え、保管コアや陸上踏査・掘削を駆使した国際共同研究を立ち上げるべく準備に入りました。インドネシアは太平洋とインド洋を分断し熱を溜める場所に位置しており、巨大地震を引き起こす地殻変動と、それに伴う大気海洋循環の変遷をひも解く鍵を握っています。これまで高知大学では農学分野での連携が中心でしたが、今後はM9クラスの地震を共に経験し、自然災害に向き合いつつ持続可能な地域を作る上で共通の目的意識を共有できるインドネシアと、地球科学分野での国際共同研究推進とそれをベースにした文理融合の学術・人材交流強化にも力を注いで行きたいと考えています。

■ 将来の課題と展望

24年9月からは国際共同研究の現場で多くの海外研究者とコミュニケーションをとり実務にあたることになっていきます。現在、大学間の学術交流協定今夏提携に向け、学内手続きが進んでいます。また以前、国際深海科学掘削計画(IODP)航海前トレーニングを高知で実施した際に受講していたインドネシア人留学生(当時、秋田大学大

ています。

学院)が、現在パジャジャラン大学に職を得ており、保管コア試料を活用した国際共同研究立案が始まりました。2024年度JSPS外国人招へい(短期)、本事業を進展させるJSTさくらサイエンスプログラムの「B共同研究活動コース」も、自然災害に関連する共同利用研究集会とタイミングを合わせて申請、吉報待ちです。